

薬史学会通信

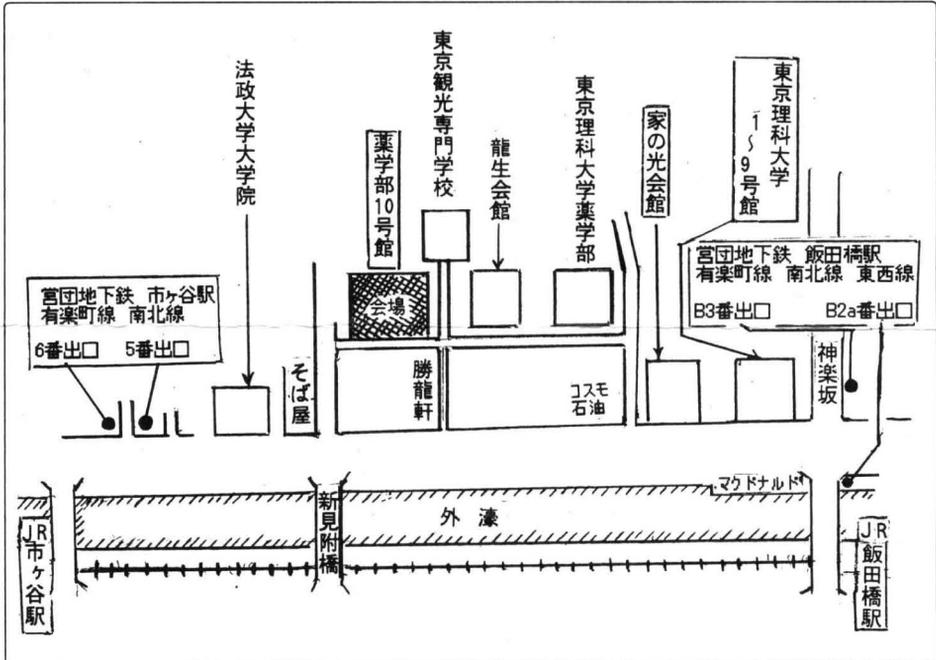
No.32 2001年9月

〒113-0032
東京都文京区弥生2-4-16
(財)学会誌刊行センター内
日本薬史学会事務局
Phone (03) 3817-5821
FAX (03) 3817-5830

日本薬史学会秋季年会・研究発表会のお知らせ

と き 平成13年11月10日(土) 13時～17時50分

ところ 東京理科大学薬学部(10号館)
東京都新宿区市ヶ谷船河原町12



日本薬史学会・平成13年度秋季年会プログラム

日 時：平成13年11月10日(土)13時～17時50分

会 場：東京理科大学薬学部、10号館・2階、1021教室

13時(開会挨拶)

演題1～6(13:05～15:15)(発表は各20分)

1. 薬史学会 後藤志朗 「和気清麻呂が献上した薬方」
2. 東京海道病院・薬 五位野政彦 「落語の中の医薬品(第2報)」
3. 城西大・薬 小原正明 「パラケルススの長命の薬考」
4. 薬史学会 黒澤嘉幸 「明治初期の陸軍薬剤官について」
5. 薬史学会 高橋 文 「ファン・スウィーテン水の日本における受容について」
6. 名城大・薬 奥田 潤 「日本の薬師如来像の薬壺」

(休憩 15分; 15:15～15:30)

演題7～13(15:30～17:50)(発表は各20分)

7. 応用薬理研 ○小澤 光、丸山 裕 「抗菌性新薬の出現と死因別死亡率等への影響」
8. 薬史学会 末廣雅也 「薬学領域からみたホルモン研究史(I) Organotherapy より Hormone therapy へ」
9. 薬史学会 山田光男 「昭和中期・臨床化学研究会の変遷—健康保険・診療報酬点数の変遷—」
10. 東大・薬 ○五十嵐 中、津谷喜一郎 「1962年キーフォーバー・ハリス修正法の論議に始まる医薬品強制実施権の歴史」
11. たちばな調剤薬局 小川通孝 「わが薬局における自前研修」
12. 東理大・薬 ○田名部紀子、海保房夫 「育毛剤の薬史的な検証」
13. 薬史学会 ○山川浩司、東理大・薬 西谷 潔 「有機化合物の構造解析のための分光計革新に関する史的研究」

17時50分(明年度富山大会の紹介; 閉会)

連絡先：東京都文京区弥生2-4-16

(財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

秋季年会実行委員長：山川浩司(事務局係：遠藤)

TEL. 03-3817-5821; FAX. 03-3817-5830

◆新刊紹介 日本製剤技術史—20世紀の製剤技術

三宅康夫 著 (株)じほう 平成13年3月31日発行 定価 本体2,600円(税別)

20世紀における technology としての製剤技術の進歩発展を簡明に纏めた本書は、岐阜薬大川島嘉明教授が「推薦のことば」で記されているように全く新しいタイプの“薬学史”書である。

明治新政府がドイツ医学を採用し、東京大学の前身である大学医学校に製薬学科を開設して薬学教育が始まったのは1873(明治6)年であった。当時、調剤は教えられていたが、長いこと独立した講座ではない状態が続き、製剤学講座が設立されたのは1951(昭和26)年であった。しかし、製剤という用語は1886(明治19)年に公布された日本薬局方で用いられている。

本書では、1891(明治24)年の改正薬局方(2局)における主要剤型のことから序章の記述が始まっている。序章には20世紀初頭の調剤術の教科書の挿絵の錠剤器を初めとして第二次大戦終戦時まで錠剤や注射剤の製造に関連して使用された機器や材料が図示されている。

第1章は戦後1940年代で6頁、第2章は1950年代では14頁で、第3章は1960年代で26頁、第4章1970年代は32頁、第5章1980年代は29頁、第6章の1990年代では42頁となっている。

本書の特徴は各章の初めに3項目のKEY WORD を掲げて各時代の時代背景あるいは薬業界にとっての最も重大な課題乃至は業界としての動きが簡明に記されているが、これはその時代の社会が要求する医薬品を世に送り出すのに製剤学が深い関わりを持っていることに対する著者の配慮の現れと考える。

各章の本文は、先ず各年代の概況として当時の日本を取り巻く社会の動きと経済あるいは薬務行政の動きを記述した後に技術的なトピックスが解説されている。統一された形式による二つの表が各章に必ずあるので時代を異にする二つの年度について比較することも容易にできるので研究者には便利である。二つの表の一つは各章ごとの年代のトピックスの表で国内経済と医療・医薬品産業・学会に分類して各年度ごとに特記すべき事項を表示してあるものであり、他の一つは各章ごとの年代の医薬品生産金額、総医療費および国民所得の推移を各年度ごとに分けて表示したものである。

そのほかに、今後薬学史を学ぶ人たちが或いは製剤学、医療薬学を志す学徒に必ずや役に立つと思われる表および図が幾つかあるので、それらの標題を以下に記す。

表12 製剤学懇談会研究討論会および製剤セミナーの主題

表13 薬学会および製剤学会における製剤学・製剤学関係の学会賞

表29 日本オリジンの国際的医薬品

表33 Millennial Pharmaceutical Scientist Award の受賞者

図59 1960年代から1990年代までの製剤学・製剤学研究を取り巻く環境要因の変化

図60 製剤的な工夫がなされた製品開発

図61 製剤学・製剤学と関連する学会や雑誌などの増加

上記の三つ以外の図はいずれも個々の製剤の特徴や製造工程を理解するのに役立つものである。

日本の薬業界、薬学会では1980年代より創薬という語が使われるようになり、今や定着してゲノム創薬という語すら日刊新聞でも頻繁に見掛けるようになった。創剤という語もすでに提唱されているが、創薬と創剤が相携えてはじめて理想的な新薬が開発されることは図60が物語っている。

「あとがき」の章にある表34、20世紀の製剤技術の発展要因(各項目3点)は170頁にわたる本

書のサマリーである。

大学卒業後、エーザイ(株)に入社して製剤の研究、開発、生産に37年間従事されて一筋の道を歩まれて、その間、学会、業界で志を同じくする人々との交流、研鑽を通じて多くの資料提供を受けられて本書を完成された著者三宅康夫博士に深甚な敬意を表するとともに内藤記念くすり博物館館長としての今後のご活躍をお祈りして擱筆し、新刊紹介の責を果たさせて頂きたい。(末廣 雅也)

日本薬史学会'02(平成14)年度総会について

と き：2002(平成14)年4月13日(土)午後

ところ：東京大学薬学部記念講堂(文京区本郷)

例年のような形式で行います。総会講演としては次の2氏を予定しています。

1. 中村 健先生(日本大学薬学部)
2. 津谷喜一郎先生(東京大学大学院薬学研究科・医薬経済学)

くわしくは薬史学会通信次号でお知らせします。

日本薬史学会'02(平成14)年度秋季大会予告

と き：2002(平成14)年10月12日(土)

内 容：研究発表および特別講演など

ところ：富山市櫻町通り電気ビル

詳細は何れお知らせします。

日本薬学会第122年会(千葉)

シンポジウム「宮木孝明先生を偲ぶ」について

明2002年3月、宮木孝明先生ゆかりの地・千葉で日本薬学会第122年会が開催されるのに合わせて、「先生を偲ぶ」催しが企画され、年会委員会により採決されました。

期 日：2002(平成14)年3月27日(水)

時間帯：09:00~11:30

26 火

宮木孝明先生は、1935(昭和10)年、東大医学部薬学科卒業後、薬化学教室勤務を経て千葉医大附属薬学専門部(千葉大薬学部の前身)教授に就任され、'49(昭和24)年薬学部長、さらに千葉大学腐敗研究所長、国立予防衛生研究所食品衛生部長などを兼任され、また、'71(昭和46)年に日本薬学会会頭に就きました。

以上のような薬学研究、教育の枠組みの中での活動のみならず、むしろ当時の薬学者の遠く及ばない世界での宮木先生の姿を見る事も重要です。先生は浅草に生まれ肩意地を張らない性格をお持ちで、薬学啓蒙の著作も手

がけ、学問研究の社会的役割について関心を持ち、確固とした哲学の必要性、また歴史的研究の重要さも説かれました。

1954(昭和29)年に日本薬史学会を創設するに当たっては、若手発起人の一人として実務を支えられました。

宮木先生の中広い見識と先見性は、先生没後の社会変動をそれに重ね合わせて考察することによって、今後、到来するであろう医療の世界の変化に対し、どのように考え、対応すべきであるかを明らかにしてくれるものと思われま

す。当シンポジウムは限られた場所と時間帯を余儀なくされていますので、事前の情報交換を密にして、内容を充実させたいと考えております。関心ある皆様からの応援を期待いたします。(日本薬史学会理事 川瀬 清)